

# 非現前的表現としての自画像

## — Blind drawing into the abyss —

上 利 博 規

### はじめに

現代フランスの哲学者デリダが西洋哲学のみならず様々な場面における再現前的思考の脱構築を試みていることは広く知られているところである。彼の脱構築的試みの中には、『絵画における真理』『視線の権利』『基底材を猛り狂わす』『盲者の記憶』など、絵画や写真への言及も含まれている。

この「再現前」(représentation)という言葉は、一般には「代理」と並んで「表現」「描出」などの意味において用いられる。とすれば、デリダの芸術論において、「再現前」の脱構築と芸術的「表現」「描出」とはどのような関係になるのだろうか。非現前的表現とでもいうべきものがあるならばそれはいかなるものであり、果たしてデリダはそのような非再現前的表現なるものを主張しているのだろうか。

近代芸術においては「表現」とは主観の精神や感情など内面的なものを感性的な諸形象という外面的なものへと表すことであると考えられることが多かった。たとえば、「表現」を意味する expression (英、仏)、Ausdruck (独) という言葉を見ても、それらは「外化」を示す接頭語 ex-, Aus- を伴っており、やはり内面的なものの外的形象化を示唆しているように見える。

ところが、フランス語では 'rendre' という言葉が「表現」という意味で用いられることがある。'rendre' は、普通は「返す」「回復させる」という意味で用いられる。そして、「返す」と「表現する」という二つの意味は、'rendre grâce à qn' (誰かに感謝する) といった言い回しにおいて重なっていると考えられる<sup>1</sup>。では、表現を「内面の外化」ではなく 'rendre' (返却・回復) として考えるとき、一体絵画は何を描くことになり、逆に絵画を見るときは何を意味することになるのだろうか。

デリダは『盲者の記憶——自画像およびその他の廃墟』(*Mémoires d'aveugle*.)

*L'autoportrait et autres ruines*, Réunion des musées nationaux, 1999、鶴飼哲訳、みすず書房、1998<sup>2)</sup>において、この問題を盲目と結びつけて論じている。71にも及ぶ図版をもつ『盲者の記憶』という書物は、ルーヴル美術館の「PARTI PRIS<sup>3)</sup>」という企画展(1990.10.26 - 1991.1.21)のために書かれたものである。この企画は、哲学者など必ずしも美術を専門としているのではない人に、ルーヴル美術館所蔵作品を中心にして美術作品への独自のコミットの仕方を提起してもらうことを意図している。そして、そこに「目を開く」様々な道があることを見出すだろう、とルーヴル美術館の学芸員は『盲者の記憶』の巻頭で述べている。

とすれば、「すべての素描家は盲目ではないのか」と問う『盲者の記憶』では、デリダは「目を開く」一つの道として「盲目=目を閉じること」を選んだということになるのだろうか。一般に、絵を描く際には「よく見て描け」といわれるし、絵を見るときにも「よく見ろ」といわれるが、デリダは「見ないで描くこと」「目を閉じること」、すなわち「盲目であること」を要求している。素描を盲者に結び付けることの意味はどのようなものであろうか。そして、そのことは、一般に考えられている「絵を描くこと」「絵を見ること」とどのような関係にあるのだろうか。

本論は、『盲者の記憶』の主題及び副題に表現されている「盲者」「記憶」「自画像」「廃墟」という言葉を手掛かりにしながら、上記の問いについて考えてゆく。そして最後に、同じくデリダの著書である『絵画における真理』(1978)に立ち帰り、そこで展開されている「パレルゴンの論理」との関係などについて言及するつもりである。

## 第1章 「描かれる盲者」と「描く盲者」

はたして「盲者」は絵画とどのような関係があるのか。そもそも、盲者とは誰のことか。さしあたっては、盲者とは素描の対象としての盲者である(図1、2「盲者像習作」コワペル)。これらの図版においては、盲者は描かれる対象(object, objet)であり、同時に絵画の主題(subject, sujet)である。

そして、デリダは「コワペルの描いた盲者たちを見てほしい」「盲者の素描の主題は、まずなによりも手である」「盲者を素描することはまず第一に手を見せることである」(p.12、邦訳 p.6f.)と、描かれた盲者における「手探りの手」への注意を喚起する。たしかに、図1のコワペルの素描において、イエスが癒し

たといわれるエリコの盲者は手を前方に差し出し、手探りで前に進んでいる。

しかし、デリダは次のようにもいう。盲者における手への注目は、同時に「盲者の手」を素描する者自身の手への注目でもある。「作品 (objet) としての手」は「作者 (sujet) としての手」へと撥ね返る。したがって、手探りで前に進む盲者の手は、同時に手探りで素描する素描家の手自身でもあるのだ。



図 1



図 2

それは形式的な意味において、盲者としての素描家が盲者を描くという自己言及的構造にあるというばかりではない。なぜ素描は盲目でなければならないのか。デリダはその理由を「描くという行為の非展望性」(l'aperspective de l'acte graphique) と呼ぶ (p.48、邦訳 p.57)。つまり、素描家が線を引くとき、そのペンの先は引かれた線と未だ引かれていない線の分岐点にあり、したがって必ず未だ線が引かれていない空間へと関わっている。既に「今日のニーチェ」と題されたシンポジウムの講演「文体の問題」(『尖筆とエクリチュール』1972)においてペンを波を切り裂いて進む船の先端になぞらえて述べていたように、素描家のペンも見えない空間を引き裂いてゆくペン、見えないものに向かって手探りで進んでゆく盲者の手そのものではないか。

こうして、盲者とは「素描の対象」としての盲者であるばかりでなく、「素描の主体」としての素描家自身でもある。そして、盲者を素描することは、手探

りて前に進んでゆく素描という行為自身を素描することになる。描かれる者にして描く者でもある盲者は、見えない空間で自らを危険にさらしつつ見えないものを考慮しながら「さまよえる手」で空間をつかむ。それは、「手による素描」(dessin avec main) にほかならない。

とすれば、盲者とは一般に考えられているように「視覚を喪失した者」というにとどまらず、「見えるもの」と「見えないもの」の二重性の中に身を置くものということになるだろう。「視覚を喪失した者」という見方は「見えるもの」に定位した一面的なものに過ぎない。そして、素描された作品も単に素描された「見えるもの」にはとどまらない。

デリダはこのことを次のように述べている、「異質性は、素描された事物 (la chose dessinée) と素描する描線 (le trait dessinant) の間の深淵にとどまる<sup>5</sup>」。この「異質性」「深淵 (の夜)」は、①未だ見えていないがやがては日のもとで見えるかも知れないもの、②「昼の現象性とは根底的かつ決定的に無縁なもの」という二つの解釈が可能であるという。そして、後者の場合には、異質性は、見えるものにおいて見えることの可能性自身として幽霊のように憑り付くことになるという。つまり、盲者としての素描家が手を頼りに探ろうとするのは「見られなかったもの」(invu<sup>6</sup>) であり、素描家は素描という行為を通して、自分が「見られなかったもの」に囚われていることを見るようになるのである。

ところで、コワペルが素描する盲者はイエスの救いを求めていた。したがって、盲者の手という主題にはイエスによる救いが含まれることになる。盲者における救い、それはもちろん見えるようになることであると考えられる。とすると、盲者は結局は「見えないもの」から「見えるもの」へと帰還するのであるだろうか。もし、そうであるならば、「見えるもの」と「見えないもの」の二重性はどうなるのか。盲者を癒すイエスについてデリダは何と語っているのだろうか。

デリダが引用する「エリコの盲者たちを癒すキリスト」の図像は、いずれも『新約』の記述に忠実に、イエスが手で触れることによって盲者を癒す様子を描いている (図3レイモン・ラ・ファージュ作、図4テオドール・リポ作、図5フェデリコ・ツッカーリ作)。イエスの手は盲者のさ迷う手に応えるかのようである。デリダは次のように述べている、「視力が回復したというこのことによって、彼が神の御業を証する必要があったのだ。一風変わった天命によって、盲者が証人となるのだ。真理について、あるいは神の光について、彼は証言をしなければならぬ (il doit attester de la vérité ou de la lumière viennent par

le Christ)」(p.25、邦訳 p.23)。

イエスによって癒された盲者たちは、証言するという責任を負わされた者たちである。責任 (responsabilité) が応答的でなければならぬとすれば、それは真理ないしは神の光に対してであろう。そして、盲者とは「描かれた盲者」であると同時に「描く盲者」でもあるならば、素描家もまた盲目性によってしか手に入れられないもの、すなわち「深淵」であり「見られなかったもの」の証人となる責任を有することになる。では誰に向かって証するのか。『新約』では視覚はもっているがしかし「ものが見えないパリサイ人」と呼ばれる人に向かってである。素描家の場合も、やはり「見えないもの」を見ようとしないう者に対してではなかろうか。



図3



図4



図5

## 第2章 返済としての幻の記憶

『聖書』(la Bible) は、まさに「証言」(testament) にほかならない。しかし、『聖書』には『新約』と『旧約』がある。これにしたがって盲者の物語も『新約』と『旧約』のものに分けて考える必要があるだろう。「新しい証言」(le Nouveau Testament) と「古い証言」(l'Ancien Testament) との間に何か重要な違いはあるのだろうか。

デリダは、「両者の関係は、しばしば見ることの分割を表している」という(p.24、邦訳p.23<sup>7</sup>)。なぜなら、「ヨハネによる福音書」では次のように述べられている

からである、「弟子たちはイエスに尋ねて言った、『先生、この人が生れつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか』。イエスは答えられた、『本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現われるためである。わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、昼の間にしなければならない。夜が来る。すると、だれも働けなくなる。わたしは、この世にいる間は、世の光である』(9章2-5節)、「イエスは言われた、『わたしがこの世にきたのは、さばくためである。すなわち、見えない人が見えるようになり、見える人が見えないようになるためである』(9章39節)。

すなわち、ここでは「昼と夜」の対比が問題となっており、イエスは両者を分割する人、「裁く人」として登場しているのである。そしてデリダはこれについて、ヨハネという証人は「真理と光はキリストによってもたらされることを思い出させる。ユダヤ教徒の方はこの光を追放した」(p.25、邦訳 p.24)と述べている。すなわち、昼と夜の分割は、真の光のもとにあるキリスト教とこの光を追放したユダヤ教徒の分割でもある。

では、『旧約』においては、盲者についてどのように物語られているだろうか。デリダはここで、エリ、イサク、トビトという盲者について言及する。エリは「サムエル記上」に登場する祭司であるが、「エリの子らは、よこしまな人々で、主を恐れなかった」ゆえに苦悩し、視力を失い、さらには息子と契約の箱の喪失の知らせを聞いて転倒して自らも命を落とす。デリダは、盲目とは直立を脅かすもの、失墜の顕現であるという。

また、イサクは「創世記」に登場し父アブラハムによって犠牲にされようとしたことで知られている。イサクはエサウとヤコブの父となり、さらには盲者となり最後の祝福を行なおうとしたとき、双子である二人の子供を見分けることに失敗した(27章)。

『第二聖典書』に登場するトビトの場合は、光である息子(p.34、邦訳 p.34)の力によって視力を回復する。この点では、『新約』におけるイエスが光として盲者を癒したことに類似しているように見える。ところが、それは息子の単独の力によってではない。息子の後には天使ラファエルが立っているのである(図6ピアンキ「父の視力を回復するトビヤ」、図7ルーベンス「父の視力を回復するトビヤ」)。そして天使ラファエルは次のように命じる、「さあ、神に感謝を捧げなさい。…あなたがたの身に起こったこれらすべてのことを書き記しなさい」(12、20-21)。この時、天使は次のように自らを告げる、「あなたがたが見たの

は幻だったのだ」。天使ラファエルは「不可視」なものの「幻」(vision)なのである。

ここからデリダは、「感謝するためには、すなわち恩寵を返済するためには、出来事の記憶を書き込まなければならない。…問題は、あるがままを言うこと、見たものを記述したり確認することであるよりは、視覚を超えて法を見つめ守ること」(p.35、邦訳 p.36) であるという。記憶は視覚の代補である (p.11、邦訳 p.5)。



図6



図7

しかし、たとえ記憶が見えるものからの離反によって獲得されようと、「描くという行為の非展望性」「素描された事物と素描する描線との深淵」に二通りあったように、やはり記憶も二通りあるという。一つは「記憶そのものの想起」(p.50、邦訳 p.58) であり、返済としての素描の起源が記憶にあることを思い出すことである (p.53、邦訳 p.62)。そしてもう一つは、想起 (anamnèse) の中に潜む忘却 (amnesia)、「記憶の孤児」と呼ばれるものである (p.56、邦訳 p.65)。

記憶が忘却されていたものを想起するのではなく、想起し得ないものにも向かうということは、盲者の記憶が書き記すのは、単に視力を失った者が再び視力を回復するという出来事なのではなかろう。それは、視力の喪失における「喪

